



◎研究事項
 桐樹の栽培法(其二)
 小川事業區概況(其二)
 木曾と小島(其二)
 ◎文藝欄
 或る夜
 巢立つ頃から
 君と別れん
 ◎通信欄
 仙華生に與ふ
 友へのかへし
 學校通信
 大正十年度學事報告

大正十一年四月廿五日 第百一十號 每五廿月(日) 治明十四年六月十四日(日) 第三種郵便物認可

研究事項

桐樹の栽培法 (前號の續き)

西澤生

其六 苗木植付後施肥法
 桐樹植根後は三四週間を経て第一回肥料として人糞尿の水肥(人糞を水五倍に溶解す)を一株に二升位の割合を以て施すべし而して第二回の肥料は發芽の際第三回の肥料は入梅の頃より夏土用前迄に第一回と同様のものを施すべし、又人糞尿に代るに厩肥及堆積肥料等を施するも可なり、尙又植付後第二年目に於ける肥料も前年同様の分量、回数季節等にして施すことを可とす。又植栽後は一ヶ年に二三回づ、除草を行ふのを良とす

其七 切株及新芽の養育

苗木植栽後二、三年の春彼岸前に株代りを行ふこと必要なり、即ち地上一寸以下の高さに鋸を以て挽切り其切株を鋭利なる鎌を以て南面に向けて斜に伐り雨水の停滞せざる様注意すべし、而して早春寒害及霜害の虞ある時は一株毎に相當の覆ひを爲すべし、斯くの如く爲せし覆ひは發芽前霜害の虞れなしと認めたる季節に至り之を除去すべし

而して新芽の養育は最も鄭重に取扱ふべし、即ち切株より數芽發生したる中より最良の萌芽一本を存立し、他の芽は悉く鋭利

なる鎌を以て切り去るべし、此際存立する萌芽に觸れざる様注意すべし、存立の萌芽につきては長さ七八尺徑一寸位の木、竹を一株毎に立て置き桐樹の伸長に促ひ軟なる藪を以て之れに二三ヶ所据り付け風害の豫防を爲すべし、若し此際に胴虫を發見したる時は紙縷の先に石油を付け其局部に指し入れ之を殺すべし

其八 伐採後の肥料及成長

春季の伐採株の周圍一尺五寸位の處に四五寸の深さに溝を掘り之れに人糞尿(水五倍)の水肥を一株に二三升又は油粕、豆粕過磷酸、厩肥等を適當の分量にて施すべし又早春に於て木灰及燒土を適當の分量に施するも効あり、又入梅より夏土用までの間に前記の肥料を施し尙此際は菜種粕の粉末及米糠等を水肥一斗に二三合宛混和して施すを可とす、而して肥料は土地の良否に關係を有するも普通の地味ならば一ヶ年に二三回施肥するを可とす、又肥料の運搬に不便なる場所にては菜種粕の粉末に木灰及細土を混合して一晝夜納屋の庭に圍ひ置き熱度を除去し而して後一株に一升宛二三回施すべし、其仰魚肥、鶏糞、蠶糞等適當に施すも可なり又清水の便利な所は硫酸アンモニヤを水一升到四十匁位和したるものを一株に一回三升宛施すも可なり、而して施肥は普通苗木植付後滿三ヶ年間は充分に施し第四年目の春以後は施肥すること稀にて可なり、又若し林中にて間作を行へば之れに

友 林 蘇 岐

施す肥料を以て桐樹に分與することなれば特別に施用するを要せず又特別肥料を施すことあるも下作物の収益にて肥料代を辨償することを得べし

桐樹新芽は切株を行ふたる當年一ヶ年に高さ一丈以上に伸長せしむるを要す、可成枝下の一丈三尺より一丈九尺五寸のものを仕立つるを可とす、即ち桐樹の賣買は長六尺五寸を一玉と稱し材積の計算標準となす故に一丈三尺のものは二玉一丈九尺五寸のものは三玉を得べければなり、されば枝下一丈三尺に達せざる劣木ある時は其冬季に梢頭の枯死せざる様竹の皮又は相當の物を以て梢頭に覆を爲し翌年春發芽前に之れを除去す而して新芽の双枝二本を残し他は切り去り數日を経て又其二枝中の劣枝を切り去り優枝の梢頭を前年の高さに伸長せしむること肝要なり尙前年枯死せし梢頭は新芽の基部より切り去るべし又樹幹に枝條を保たしむるには梢頭に四段乃至五段を附着せしむるものとす若し枝下一丈三尺に充たざる時は枝條三段に爲すも散て差支なし、又下段の止枝より下部の新芽は五月上旬頃枝切り用具を以て悉く切り去り尙以後も無用の枝は見當り次第切り拂ふ様になするを可とす

第九 害虫の種類及驅除

害虫の主なるものはツボウムシ、キクヒムシ、ウンガ、チンゾウ、チンダノスピヤウ等とす尙此等の驅除法は次の如し

ツボウムシ、キクヒムシの驅除は害虫の穿ちたる孔を鬚附油又は粘土を以て固く塞ぎ害虫を窒息せしむべし又下部に喰ひ込み居る時は注入剤を以て殺し又は鐵線包みで突殺すべし、或は細き紙縷に火薬を包み導火の如きものを造りて之に着火して殺すも可なり

ウンガの驅除は石油乳劑を製し水に溶解せしものを噴霧器に移し之れを以て害虫の群集する局部に注ぎ之れが滅亡を計るべし又其近傍の桐樹のあるときはそれにも豫防の爲め施劑するを可とす

チンゾウの驅除は害虫を見當り次第捕殺し其甚だしきに至りては石油乳劑液を以て局部に注ぎ地上に落ちたるものを壓殺して燒棄すべし

チンダノスピヤウ驅除は桐葉に黄色又は蒼白を呈したるを發見せば之れを切り取り燒棄す尙甚だしき病樹を伐採し其切株には石灰を散布すべし

尙豫防法としては新梢嫩芽にホルド液石油乳劑等を注ぐを可とす又驅除劑としては除虫菊粉末十二匁を石油七匁に和し半日位其儘浸し置き後水一斗に和したる液を噴霧器に依りて散布し驅除するも可なり(終り)

小川事業區に於ける 伐木運材事業概況 (其一)

長谷川 毅

現今本邦林業界に於て伐木運材事業の最も盛大に且發展して居る地方と云へば先づ第一に我が木曾御料林を中心として經營して居る處の一大森林地に指を屈せずばなるまい、若し夫れ林業家にして伐木運材事業を語らんと欲するものは、此木曾林業を見ずして語る可からずと云ふも決して過言ではないのである就中私が今こゝに少く諸賢に御紹介して見ようと思ふ小川事業區に於ける諸種の伐木運材事業は此木曾林業を代表的に現出して居るのみならず、從來の所謂木曾式運材法に最新の機械的工學的知識を注入して改良したる處の最も進歩せる現代的林業として全國に其名を恣にして居るものであらう、如何に林業が山間僻陬の地に於て自然力及び人力に依りて開發せらるゝものとは云へ同じく社會一般國家公共の重要な生産業の一として一日も忽諾に附すべからざる以上は、漸次科學的機械的に發達せしめて社會國家の生産物を増殖せしめ一般人類の經濟上の安定乃至向上を助長せしむる事は現代林業經營者の最も覺醒しなければならぬ緊切な問題である、此點に於て小川事業區に經營されて居る諸種の伐木運材事業は此趨勢と逐年の試練とを以て我が林業界に於ける先驅として日々刻々に發展し今や文化的理想林業が生れんとして居るのである、私は過古四箇年の間此事業區に一小掛員として従事したのであるが本區の伐木運材事業に就ては毎年多數の見

現今本邦林業界に於て伐木運材事業の最も盛大に且發展して居る地方と云へば先づ第一に我が木曾御料林を中心として經營して居る處の一大森林地に指を屈せずばなるまい、若し夫れ林業家にして伐木運材事業を語らんと欲するものは、此木曾林業を見ずして語る可からずと云ふも決して過言ではないのである就中私が今こゝに少く諸賢に御紹介して見ようと思ふ小川事業區に於ける諸種の伐木運材事業は此木曾林業を代表的に現出して居るのみならず、從來の所謂木曾式運材法に最新の機械的工學的知識を注入して改良したる處の最も進歩せる現代的林業として全國に其名を恣にして居るものであらう、如何に林業が山間僻陬の地に於て自然力及び人力に依りて開發せらるゝものとは云へ同じく社會一般國家公共の重要な生産業の一として一日も忽諾に附すべからざる以上は、漸次科學的機械的に發達せしめて社會國家の生産物を増殖せしめ一般人類の經濟上の安定乃至向上を助長せしむる事は現代林業經營者の最も覺醒しなければならぬ緊切な問題である、此點に於て小川事業區に經營されて居る諸種の伐木運材事業は此趨勢と逐年の試練とを以て我が林業界に於ける先驅として日々刻々に發展し今や文化的理想林業が生れんとして居るのである、私は過古四箇年の間此事業區に一小掛員として従事したのであるが本區の伐木運材事業に就ては毎年多數の見

友 林 蘇 岐

學者もあり又諸方より種々の紹介あつた事であるから、今事務閑暇の時を幸に拙文不才の身であるに拘はらず幾分なりとも諸賢の御資料御参考にもなれば無益な事ではないと思ひこゝに駄筆を採つたのであるしかし從來の木曾式伐木運材法は一般的に悉知せられて居るのであるから、只如何なる點に於て小川事業區の伐木運材法が木曾式の其に異つて居るのであるか、又其新しき作業法とは如何なるものであるかに付て其概略を説述したいと思ふのである、先づ順序として小川事業區の施業法案の概要を述べなければならぬと云ふのは伐木運材事業は林業の實際的直接作業であるけれども是を計畫策立したる施業案に關係深いものであり又當區に於ける施業案は御料林中での模範的に編成されて居るものであるから極く簡単に説明する事としたのである

一 施業案

(イ) 位置、地勢、其他

小川事業區とは縣下西筑摩郡駒ヶ根村大字小川入及び全村大字萩原、西山、其他數箇所の御料地を集團とせる地域を稱するのである、しかし其大部分に小川入御料地である其地勢は小川なる一大溪谷が此地域を形成する主なるもので、分水嶺は全郡王瀧村瀬戸川及び鹹川並に全郡大桑村阿寺に接觸し、南に駒ヶ岳の峻嶺聳然として連峯の中に現はれ東北に御岳の雄峯巍々として天を摩するを見得べく、幾多の溪流の西、南

北より集つて成れる一帯の水帯は曲折蛇行して西に走り全村上松の對岸に於て木曾川本流に合して居る切形は天恵とも云ふべきか實に平坦緩斜地が多く且山脚の短くして凡ての事業設備に便利で殊に後設の造神宮備林(小川入字中立御料林所在)の一帯の如きは驚く可き平源地があるのである、而して其地味、氣候は何れも木曾の五木を始め松類其他の温帯潤葉樹の成育に最適で交通の便利なる點に於ては獨り御料林中のみでなく全國の森林地に於ける冠たるものであらう、(此事は後説に譲る)

(ロ) 森林の區劃

本區に於ける森林の區劃は、従前天然區畫を用ひたのであつたが、去大正三年度施業案檢訂の際かの路網を設定したので現在の區畫は從區畫を溪線及び峯線に依り、横區畫を路網に依りて出來て居るのである、尤も路網の設定は區畫の境界を主目的として居ない事は勿論で將來の搬路の豫定線事業地の管理巡視其他の用途に重きを置かれて居るのである、然らば路網の延長、勾配は幾何であらうかと云ふに

總延長 一〇三、九八〇間
最急 一四%
平均 六%

である、其面積、輪伐區、區畫班數等を表せば左表の通である

Table with columns: 區, 面積, 町區畫, 班數, 一區畫班面積, 町區畫面積, 最小平均, 最大平均. Rows include 全, 林業地, 班數, 町區畫, 面積, 町區畫, 班數, 一區畫班面積, 町區畫面積, 最小平均, 最大平均.

(ハ) 林況

(一) 人工林と天然林との面積 現在に於ける當區の人工林と天然林の有する面積は、その位であらうかと云ふに人工林約一千町歩、天然林約五千四百町餘では百分率にすれば人工林一七天然林八三になる譯である、

(ニ) 樹種の分布

小川御料林の良材貴重材に富んで居る事は王瀧御料林の美林と共に世に名高いのであるが其中でも、ヒノキ、サハラは生育最も順調で且天然林の大部分を占めて居る、一昨年即ち大正九年度に於ける當區の伐木事業は神宮御造營材伐出事業が主なる官行事業であつて大正十八年式年御造營に用ひらるゝ、神宮御用材が多數伐採搬出されたが其樹種は全部此ヒノキ。

サハラの二種であつたのである、其本數七千二百二十四本、材積一万六千三百八十六石九分三厘と云ふ多量の數であり木會、飛驒の全御料林で伐採されたる總御用材の七割を占め其最良のものは四十五尺もあつたのであるから、余程の良質な美林でなければ到底求め難き事であると謂はねばならぬ、實に此年度の伐木事業は小川伐木事業所の林業史として特筆大

Table with columns for forest types (針葉樹, 闊葉樹, 混合林, 單純林) and their respective volumes (材積) and percentages (割合).

木曾と小鳥 (續き)

辻井 誠造

惠那山麓の前山にある鳥屋でツグミ、ミヤマ等を調査しました。私の行つた鳥屋でもツグミ、ミヤマを捕獲するのが主なる目的で其他の小さい鳥はあまり捕りません今年にはミヤマは比較的來ましたし且、オトリがよく鳴いたので割合に澤山とれました然るにツグミは少なくオトリが働かないので不獲でした、年によつて鳥の澤山來る年もありこの年もありますが

書すべきものであると云つて良からう此ヒノキ、サハラの外アスナロ、ネゴコカウヤマキ、ヒメコマツ、ゴエウマツ、タクヒ(以上針葉樹)、カツラ、ブナ、ミズメ、ナラ、サハグルミ、ハリギリ、カバ、サクラ、ゴンゼツ(以上闊葉樹)等善く地質に適し相混交繁茂して鬱蒼たる大天然林を成して居る是等の樹種の分布を面積上より表示すれば左表の通りである

三種とも同じ様であるし鳴聲も區別がつかない。鳥類の食物は内田氏の調査に依れば十一月より四月迄六ヶ月間二百八十一羽に就ての観察では食餌中動物質五十九パーセント植物質四十一パーセントにて動物質食餌は大部分昆虫類で他の種類は全体の六五パーセントに過ぎない害虫類中最も嗜好する種類はシヤクトリ、夜盗虫、根切虫、二化螟虫等の鱗翅目幼虫である又植物質の食物は多くは山野に自生して居る雑草でネズ、ヘクソカツラ、サルトリイバラ、ノイバラ、シホダ、ヒセラギ、エビヅル、アヲツバラ、フヂ等だ(昆虫學汎論下巻四〇二ページより)あるが此地方に滞在する鳥は十二月以降は地中のミ、ズ、クモ等をも盛んに食ふ鳥の群の中には他の渡り鳥の様に必ず一羽つゝの指揮官らしいのが居る之を八十鳥と言つて居る、此指揮官の進む方向に他の者が従つて行く、鳥屋で追つた場合にも八十鳥が高く行けば他の鳥も高く飛び、低く進めば低く従うものである、

(ロ) 驚いて舞ひ立つ時に云ふ場合と自分の群の散在して居るのを大体集めるときに用ふる、之を激しく云ふ場合に驚いて舞ひ立つ
(ハ) は群を引き付ける様な時にやる
(ニ) は群になつて歩るときの場合に使ふ
(ホ) タイノノの一種異つたもので矢張意味は同じらしい
(ハ) 之の鳴聲は恰もシャフトンの油の切れた様な音で四邊を警戒して静まれと云ふ様な場合に又は其場から逃げずに潜んで物蔭に居れと云ふ程の時に鳴くものと思はれる
(ト) 轉方には種類頗る多い之は鳥の營養状態とも關係があるらしく瘦せた時には常にタイノノ鳴きをするから

鳥の年齢に就ては不明である野生のもの二十年以上は生きるらしい、普通の家で飼つたものでさへ十七八年生きのびた例がある依つて捕つた時已に二三年をへたものも考へると廿年までは保たれる事になる、鳥にも色々な病氣があるが人間のランカン様の病氣もある、其外足が荒れたり鼻がつかつたり聲がかけたり時にはセキもする眼病下痢羽には寄生虫がつく、鳩の性質として幾ら長く飼つても野生の氣分が離れない前號の捕鳥日記によればツグミの全盛期は福島地方では十一月の七日頃より十二日頃まで、一日に五六羽から四五百羽もとれる事があるのに惠那山麓の鳥屋ではミヤマの方が多くてツグミは誠に不獲であるこれは鳥の通路の異なる爲であるか又は福島地方で捕獲される爲であるか不明である

「もうHも入るな」
と呟いて悲愁の感に聳々と心の奥の奥までも込み通らせて俯きながら焼點のない視線を遊ばして居る
「父さん生徒さんが見えたよ」
と愛らしい聲に我に返るのであつた
火燧に奥さんと差向ひのH先生は小さな枕して毛布を掛けて貰つた子供のスマスマと嗜眠ののに見入つて居たが
「今夜は合宿宿直であつた！尤も點呼はないのだが……」
など吞氣極まる事を云うて居る
カラカラと戸が開く、奥さんが白魚の様な



文藝欄

或る夜 自惚子

十二日 六 五 四 三 四
十三日 九 八 五 三 四
十四日 一 三 八 二 四
十五日 一 四 六 二 二

手を突いて
 「行つていらつしやい……」
 と送り出した
 彼はトボトボと街燈に長い蔭翳を曳かせながら御料支局の暗い寂しい處へ出ると冷たい風がスウと頬を撫でた、胸の邊から背まで栗立つやうに思はれ、
 「何となし今夜は厭な晩だ……」
 と獨語いて見たもの、行かではならぬ、ポツポツ足を運ぶ其音が何かに反響して小さな音が續く薄ら穢氣な町並には火影一つもない、晝までの雨には所々に泥濘を作つて居るので覺束なげな足取には時々はまるハットしては不快な氣分を咬るのであつた其都度ホツと息を突き空を仰いで立つ星が雲間にチラチラして微笑つて居る、どうも大丈星らしい
 蒼穹を狭める黒い巨人、重々しいどつしりとした強さを持つた其足下に飴を打つて驚々鳴響かせて俵藤太が射取つたと云ふ百足のやうに長く爛々と輝いた眼珠は物凄く徐々南行煙を殘して過ぎ去つた、後は元の沈黙に戻る
 又ポツポツと歩き出す黒川渡の橋の邊は凸凹となつて居るので躓き躓き連ると足音が物の氣のやうに後から就いてくる、度々振り返つて見られる
 其あたりは寂然として河のセセラギばかりが耳に付いて塵埃で薄暗くなつた街燈が上の方から冷々付くやうな光を樹木に投げ蔭

には魔の神の在處もありさう
 それから左に曲つて橋に差籠る、渡り終ると直ちに坂にかゝる峯の風か身を縮めるやうに帽を掠めた其時……自分の空耳か、はた事實か幽かに微かに注意深く、忍ぶやうな人の足音を聞いたやうと思つて立止つた暗さは暗し見るに由もない
 噫息を殺して躍る胸を潜めて氣はひを伺ふと時計のセコンドばかりが耳に就く
 「何だらう……今の音は……確に人の足音それとも……或は此邊の藪の小鳥の夢を自分が破つて……」私語ながら頭を曲げたそれきり音はない、不思議と思ふ頃は物の五分も過ぎ胸の動氣も稍静まつた。
 夜は益々森閑と靜に寂莫の底に落ちて行く
 不意……不意！昔の物語本にでも見るやうな忍術使ひの薄黒い怖ろしい影がスウッと少し先に地から湧いたやうに思はれた、幽霊！とはこれかギョツとして身も心も凍むやうに覺れた。今の黒川渡の魔の神に自分は捕へられたのではあるまいか！顔も何も見えないが確かに女、暗い處で女、丑先生駭慄ひも來たらしいよく見ると女と並んで身体の細い様な男の影がほのかに浮いた！見る見る其影が段々薄れ薄れて、どうどう見なくなつた
 「眼の故か知らん」
 自分を玩具にせられた様な噴怒さへ感じた背に流汗が冷たい。夢中になつて飛び出し

た坂は急になる。石は多い。暗い凸凹で蹠く足を踏み直して立つ。下方は麗れたやうな形に樹木が繁つて上方は山で松柏が密生して魘魅の足下立つ様それでも風が當るらしい。サラサラと鳴つて居る
 塗端！學校の東南の角の小路に一つ提灯が出た。フラフラと浮いて飛ぶやうに見ゆる先生の心は一度ならず麗れて今は空虚になつて居る。其處へ又後からザツリと風が襲つてカサカサと揺るがして出た……思はず眸を向けると可なり大きい鼠色のやうな圓い長みを持つたもの、動くのが眼に入つた其肌は柔か相に綿で包んだ弾力がありさうと同時に身は深い深い空谷の濕地に太い太い樹木の鬱蒼とした下の朽葉の堆積を踏む中に陥穽へ落ちたやうで。恐怖……襲はれた氣分……身は凍み……髪の毛は一木立して激しい戦慄の一過を覺れた
 だが眼は再び働く様になつた。提灯も見えない……自分ながら噴怒に羞恥を感じずには居られず苦笑した
 言ひ難い不愉快を味ひながら門を入ると窓硝子がガラリと隕石のやうに冷く寒く光つた巡視なぞそこそこ僅かに眠つたと思ふと便氣を催して眼が覺める。後頭部から背部臀部へかけて床に當る個所が堅く固く痺れて居た。火燧へ覗かして居た足など棒のやう。足かけ五年と云ふもの慣されて來て居るので驚きもしないが……それでもい

、氣持ではない。今夜は此處に……又長く眠れないのだらうが實にツライ。だから夜は極めて長い。晝の雨で水量が増したのであらう類に谷川が鳴つて居る。

巢立つ頃から……(二)

濁川葎太郎

私が此の名古屋へ來てから二度目の林友を受取つた、今日は昨日迄連日に渡る出張ですつかり身心共に非常な疲労を覺てて社へ出て來てもボカンとして仕まつたはと言つた仕事もなしを三日中に又木曾方面へ出張せねばならぬ事になつて居るので机に向つたもの、何も手に付かぬ、其處へ林友を給仕が持つて來た、早速封を切つて見た、私は何時も林友を手にする度に湧然と學校時代の事に思ひが及ぶ。

八釜しい卓上電話の響きもタイピストのカタンと響く音も耳に這入らない、巢立つ頃から……と言つた様な題で本當に學校を巢立つ頃あの赤い原稿用紙に三四枚書いた事を覺て居る、今日は大正十一年三月すると巢立つてから滿二ヶ年過ぎた、けれど今自分を顧ると矢張りお尻の卵はついて居る、口端は黄色い一体何時になつたら一人前になれるのか知らんと思ふとなさげなくなる。

時折り卒業記念のクラス一枚の寫真を出して徒然のまゝ、二人々々を穴のあく程な

がめて、丁度久方ぶりで再會した時の様に長い問心の中で話して見る、が其の中に今は世になき三人を數へなければならぬのが悲しい寂しい事だ、九年の秋あの色の眞黒い向井君を失ひ、拾年の秋にはあの口ごもる直井君に逝かれ十一年の一月四日にはあの温孝な橋爪君の長逝にあひその三人が三人とも自分にとつて最も思ひ出多い人々であるだけそれだけ其度に奈計に驚ろかされ且つおびやかされた、それらが卒業以來一度も邂逅の機を得なかつた爲めそれらの人々にも何時か面談する折りもある様な氣がしてならない。

殊に橋爪君は昨年の秋頃から甲府の病院で苦んで居たのだつたが正月年始が來なかつたから若しや……と言ふ様な不安を抱いたり想像して見たりして居たが私が名古屋へ來た時早速住所を知らせ旁々其の理由を(實は年賀状を貰はなかつたので少し怒り氣味で)問ひ正してやつた、思ひきやつた一人の男の子を亡くした悲しい母の氣で生前の御世話になつた事や泣き事の便りを受けようとは。

話は變るが妻帯したものも五人ある(但し自分の知つて居るだけで)中越君、原榮太君、村上君、高橋君、そう言ふ自分と。(此の外にまだあるのだつたらよろしく自分から廣告あつて然るべし)こう書き上げたなら實際初耳の人も澤山ある事だらう。其高橋君の事で面白い話がある、實は本

年の正月の事だつた、秋田の方に行つて居る八木君も寒い満州から一時歸休で歸つた遠山君も駒場に居る中越君も皆が郷里に歸つて久しぶりの面會に物語は次ぎから次ぎとつきなかつた、けれど一年志願から歸つた高橋君が少しも顔を出さなかつた、所が其處に高橋君の結婚問題を耳にした、吾々集まつたもの、話題が期せずして其處に集中した一月七日が華燭の典を擧げるんだとか言ふ噂を耳にしたので七日に秋田へ向ふ筈の八木君を止めさせ八日に王瀧から出て來る中越君に、郵便で呼びよした遠山君と四人が揃つて一夜を飲まうといふ相談だつた、さて當日になると集るには集つたが當の御本尊様が雲隠れの形。

頃と住所さへ分らん事になつて仕まつた八日の午後十六回の家高吾が訪れて呉れた其處へ折よくも西澤先生の御來訪を受けて三人して昔話して時のたつとも知らずに淹茶を飲んだ、其處にも高橋君の行方不明が話題に上つた、九日の十一時で八木君も未戀を殘して秋田へ向つた、たしか其の日だつた、高橋君の所へ今から考へると訪問した様だが其の當時余り香沙汰がない爲めに交と迄に手紙をやつた。間もなく自分は名古屋へ來た
 返事の手紙は廻送されてこつちで見た、自分も忙しきにまぎれて、遂に祝辭も申上げない様な譯だ。其の後木曾へも一度出張したが未だど面會の機を得ない、紙上で御

詫びして置かう、併し私が名古屋へ来ると間もなく盛典があつたさうだ、自分も住所を知らしてないから無理もないが、何れ正式に御披露があると思つて居る。

脱稿に至らずとて其のまゝにしてあつたが今日は又木曾へ出張を命ぜられて、千種から車中の人となつた。

名古屋でもクレバーチットでは一寸うすら寒い感があるのでオウパーセッターを着たに冬オーパーの袴を立て、出かけた。勝川にもいくつかの随道を通つて車は山の中へ中へと走つて居る。郷里福島に宿つて明朝阿寺へ行かなければならぬ。母校の生徒諸君も今は試験で相當苦んで居る頃だらうから。誰にも黙つて歸る事にしよう。

三年生諸君も就職又は入學試験と言つた燈火を前に輝かして勉強に急い事と思ふ。先日三年生のK君から自分の前に居た會社の様子を知らして呉れる——と言ふ様な手紙が来た。

三、七、千種、木曾福島車中

君と別れん

一年 生

運びまじやうよ、
ざるのお米を。
買ひに行まじやう、
豆腐屋へ。
樂しう一歳過去つた。

唄ひまじやうよ、
君と別れて……
吟じまじやうよ、
謂城長雨……
窓の櫓も振うてる。

祝ひまじやうよ、
卒業を。
惜みまじやうよ、
離別をば。
村雨通つて音がする。

唱ひまじやうよ、
雲井に發ゆ……
堅めまじやう、
友垣を。
おや鶯が啼いてるやう。

通信欄

仙華生に與ふ

心甫生

自分は先月號中仙華生君の「愛さんが爲め」

に」を讀んだ。そして如何にも表題の如く愛さんが爲めに書かれて居るのかどうかを疑つた。元來林友誌に對しては余程以前から改善改善と呼ばれて居た、自然在校の諸先生も種々苦心されて出来る丈の誠意を盡されて来た事と信する。

然し仙華氏曰く「近來本紙に掲載する事項が林友發行の主旨に反し悪化の傾向を示せるにあらざるや」と。又「之は突發的に思ひ付いた事ではなく近來常に痛感して居た事であつたのだが」と前置をしてある、我が同窓中に未だ斯くの如く堂々と林友誌をして顔色なからしめたる事は嘗て無かつた事であらう。

今まで改善を叫ばれた諸兄の意志は温健であつた、兄弟の情の温さであつた、又美しい忠言の送りであつた、そして如何に發展せしむべきかに就ての方法論であつた。

仙華氏の如く林友發送簿の点検を申出られし事も無かつた。

若し仙華生氏の記事を校友會以外の者(勿論多方面に涉り居る事と信する)が一讀した時どんな感じを起す事だらう。同じ蘇門を潜つた者同志の間で此んな事を云つて居るのかと覺悟する事だらう。

眞に我が蘇門を愛する心あらば編輯者に向て忠言を寄せられるべきではないか?殊に近來常に御考へであつたと云ふならば少く以前に、欠点を前號の如く誌上に到舉して公にさる、は鞭撻に似て鞭撻に非ず反て

編輯者に向て反感を起さしむるものに非ずや(と疑はざるを得ず)

又全氏曰く「併し原稿少き時は白紙となすも止むを得ない事にして兩者就れを探るべきや論ずる迄もない事の様に思ふ。」と、愛さんが爲ならば林友誌を白紙にしても宜しいのか? 仙華氏よ若し兄に一愛子ありとせよ而して不幸にも其愛子に欠点ある時は兄は此れに死を論ずるや、欠点の依て來たる處を追求し改善の方法を研究してこそ眞に親の情愛を示すものではあるまいか。

林友に白紙を命ずるとは! 兄の表題とあまりに矛盾して居ないであらうか? 尙兄は「文藝欄丈げでも廢止するのが至當であると思ふ」と仙華生よ千差萬別は人間の趣味である事は論を俟たず。蘇門を出し者も進路は様々にして従て各人の趣味も單に境遇上から見ると多種多様である。况んや各自個性を有し居るに於てをやである。他人趣味を云々すべからざるなる事は言ふ迄もあるまい趣味の獨占! 恐るべきではないか。

擱筆するに當て再び云ふ。本誌の欠点(然も獨占的な)を公にするは果して愛さんが爲であらうか? 原稿の少きを以て本誌に白紙になれと命ずるは果して眞の愛情から出たる者であらうか? 一歩進んで如何に原稿を豊富にすべきか? 問題に就て巧究を願ひ度い、仙華氏は短刀直入と自稱して書かれて居る。然り眞に愛せんとせば徒らに美

辭を弄するの要なし短刀直入を以て與ふる事斯くの如し乞ふ諒せよ。

友へのかへし

K 生

A君 何時も御手紙を戴くばかりで祿に御返事も出さず御無沙汰ばかりしてほんとに申譯ない、然し君ばかりせやない、御存じのS君からも手紙を貰ふばかりで少しも返事を出さぬものだから昨日も例の調子で随分嫌味を書いてよこしたよ、その書方が亦頗る直入的なんだ

K君、一体君は生きてるのか、死んだのか無論生きてると思ふから僕はこの手紙を出す、然し少しも返事をくれぬ所から察すると君は病氣でもしてるのじやないか
その病氣も僕は唯の病氣だとは思ひたくない、よく若い者にあり勝な美しい罪惡でも犯してるのじやないか……「なんてね僕もその時にはおかしくもあり亦申譯ないよ云ふ氣も起つたけれどそれもすぐ消え去つて今では亦イライラした落付かぬ日を過して居る

實際昨今の僕は机に向つて手紙なんか書く程落付いて居られないだよ
そして近頃つくづく僕は「赤い女のやうな女をのしり抱いて絶壁から飛び下りたら……」そんな事を思ふ
ほんとに僕は以前から神經衰弱だつたのが最近起つた——僕としてはかなり重大な出

來事のために益々その度を強めて夜も碌々眠れず讀書すら少しもする氣になれぬ、それで役所から歸るとすや床の中に這入つて精神を落付けやうとどつとどめるけれどそれは何時も徒勞に歸してしまふ、朝起きても唯「お早よ」と挨拶するばかりで御飯の時も黙つて嚙き込んで食べて居るので同宿のHさんは何時も滑稽な話をしては僕を笑はし僕の心を引き立てやうととして下さる僕が嚙き込んで居るために假令少しでもみんなに心配をかけるのが何だかすまぬ様な氣がする

今朝もね随分おかしくもあり亦不思議な氣もした
みんなが一所に朝飯を食べて居ると其處へ「Hさん電報」といつて配達人が電報を置いて行つたのだよ、でHさんはすばやくそれを取り上げて讀み始めたがその顔があまりにおかしいので「Hさんどうしたのです」と僕が問ふと
「どうとう姉が空氣を吸ひ込んだま、吐き出さなくなりました」
「え? そりや何の事ですか」と重ねて問ふと

「姉のね眼の球が動かなくなつたからすぐ歸れ」といつて來たのです
「では死なれるのですか」
「え、難産のために二人とも死んださうです兎に角僕は役所の方は缺勤してこれから直ぐ歸ります」といつて郷里へ歸られた

△君、君はこの問答を別に何とも思はない
 かい、僕は現在姉が死んだと云ふのにこ
 な冗談が言へるHさんの心理状態が不思議
 でならぬ
 何事も運命だと諦めてしまへばそれまで
 だけれど僕はどうしても運命とか宿命と
 かいふ事を信ずる気にはなれぬ
 若しも僕が最近の出来事すべてを運命だ
 と諦めざる事が出来たならば僕はこんな
 まに苦しまなくとも済んだらうと思ふ
 兎に角近いうち歸郷するからその時詳しい
 事は御話し又故郷の小さい出来事も聞く事
 にしよう

學校通信

○第十九回卒業證書授與式 本校第十九回
 卒業授與式は三月廿日午前十時より本校講
 堂に於て舉行せられた、本縣廳よりは岡田
 忠彦知事閣下の御臨席、一同着席するや、
 校長先生舉行の旨を告げ次いで勅語捧讀、
 君が代合唱、中村先生の學事報告が終つて
 卒業證書授與をし更に各學年優等生並に皆
 勤者に賞状を與へられ、卒業生に對し校長
 先生より懇篤なる訓辭あり、次に知事代理
 告辭を朗讀せられ、其他諸賢よりの祝辭あ
 り、松本高等學校、上田蠶絲專門學校、卒
 業生今野啓藏君の祝辭を代讀せられ、本校
 生總代の送辭、卒業生總代の答辭ありて正
 午式を了つた。

○卒業生の出身地及氏名左の如し

原籍	氏名
岐阜縣	1 片田 敏郎
全	2 樋田 良市
石川縣	3 岡田 廣平
長野縣	4 石原 元
岐阜縣	5 伊藤 良雄
長野縣	6 高田金次郎
岐阜縣	7 片桐 藤吉
兵庫縣	8 須田 順吉
長野縣	9 宅見 剛三
岐阜縣	10 原 一水
長野縣	11 安藤 覺
岐阜縣	12 前野 義宗
長野縣	13 小縣 正幸
岐阜縣	14 小幡 榮一
全	15 小松 順市
全	16 小林孝三郎
岐阜縣	17 今井與一郎
愛媛縣	18 近藤 清美
愛知縣	19 山田 憲夫
山梨縣	20 堀内 英一
高知縣	21 門田 繁
岐阜縣	22 福井 浩
岩手縣	23 千葉 清種
岐阜縣	24 田近 三郎
長野縣	25 桃井 武男
全	26 市岡 巖
全	27 伊藤 三男
全	28 藤野 千束

○賞状受領者

優等生	片田敏郎	樋田良市	岡田廣
平(三年)	原金一	小松雄二	田中文
正(二年)	今井一	井出進	小野
久孝	米倉寛(二年)		

在學中精勤者 小幡榮一
 本學年皆勤者 原金一 小松雄二 田中
 文正 樋口靜雄 片原宏(二年) 篠原七木
 唐澤繁喜 水野作 吉田邦男 手塚節次
 有賀瑞穂 細江憲三 新村洋 森軍次
 森田寛雄 岡島英二 所井深見 蜂谷晃
 武居勝(二年)

山形縣	29 山岸七之丞
長野縣	30 鈴木 壽雄
全	31 大井吉日兒
全	32 岩井泰二郎
全	33 永井 武治
全	34 宮澤 要
全	35 大島 保男
長野縣	36 稻垣 阪樹
全	37 北原 隆頼
島根縣	38 宮澤 孝
長野縣	39 稻積 須介
岐阜縣	40 奥原謙次郎
長野縣	41 林 繁市
岐阜縣	42 原 宗重
長野縣	43 加藤和一郎
岐阜縣	44 大澤 次郎
長野縣	以上四四名

○本學年中精勤者 小幡榮一(三年)

○大正十年度學事報告

一、本學年度始に於ける在學生數

內譯	第三學年	四八名
	第二學年	六〇名
	第一年	八七名

二、生徒出身地別

本縣	一一六名
他府縣	七九名
內譯	
岐阜縣	四六名
山梨縣	八名
愛知縣	七名
山形縣	三名
高知縣	三名
靜岡縣	二名
富山縣	二名
兵庫、石川、岩手	
三重、島根、愛媛、福島、北海道各	
縣一名宛	

三、本年度の半途退學者 一一一名
 第三學年 一名
 第二學年 二名

四、本年度末在籍生徒數 一八四名
 第一學年 八名
 第二學年 四七名
 第三學年 五八名
 第一年 七九名

五、本年度授業總時數
 第一學年 一一六〇時間
 第二學年 一一五八時間
 第三學年 一一五三時間

六、修學旅行 第三學年
 大正十年五月二日より同十一日まで十日間
 林業其他實地見學のため愛知、三重、奈良
 和歌山、大阪、京都の二府三縣へ、同年七
 月二十日より二十九日まで三日間伐木運材
 事業視察のため王瀧村、駒ヶ根村へ

第二學年
 大正十年五月十五日より同二十一日まで七
 日間實地見學のため神奈川、東京、栃木、
 長野の一府三縣へ
 同年七月七日より同卅日まで四日間南安曇
 郡安曇村へ林業視察

第一學年
 大正十年五月十八日より廿一日まで三日間
 實地見學の爲め上伊那、東筑摩、松本の一
 市二郡へ
 同年七月廿七日より同二十九日まで三日間
 御嶽山の森林、植物、礦物等實地視察のた
 め三岳、王瀧兩村へ
 七、學年試驗成績 第三學年 四七名
 卒業するもの 四四名

優等賞を受くるもの 三名
 在學中精勤賞受領者 一名
 第二學年 五八名中
 第三學年に進級するもの 五三名
 優等賞受領者 三名
 皆勤賞受領者 五名
 精勤賞受領者 六名
 第一學年 七九名中
 第二學年進級者 七一名
 優等賞受領者 四名
 皆勤賞受領者 四名
 精勤賞受領者 一三名

八、卒業生の狀況
 第一回より第八回即ち前年度迄の卒業生
 は總數 六一七名
 內譯 四三三名
 本縣 一八四名
 他府縣

此の他府縣中主なるものは岐阜縣七四名
 石川縣二名、山梨縣一七名、愛知縣一
 名等とし其他一府二縣に及ぶ
 其の現況は
 各官廳に奉職せる者 三五六名
 會社、民間資本家に被雇者 八三名
 海外渡航中の者 五名
 進で修學中の者 一四名
 兵役に服徒中の者 一一名
 教務に従事する者 六名
 家事に従事する者 九五名
 死亡者及狀況不明者 四六名
 以上

告 辭

木曾山林學校卒業生諸子諸子ハ多年螢雪ノ切成リ本日ヲ以テ卒業ノ榮譽ヲ擔フニ至リシハ余ノ尤モ欣快トスル所ナリ本校ハ我が國唯一ノ山林學校ニシテ從來多數ノ卒業生ヲ出シ我國林業ノ進歩ニ貢獻スル所尠カラズ惟フニ刻下我國ノ要務ハ世界列國ノ間ニ伍シテ産業ノ根基ヲ培養シ國力ノ充實ヲ計リ以テ文化國タルノ使命ヲ完フセンコトニアリ而テ之ヲ我國林業ノ實況ヲ徵スルニ其經營漸ク見ルベキモノアリト雖モ近來木材ノ需要急激ニ進ミ而モ未ダ植林ノ事業之ニ伴ハズ木材ノ利用未ダ完カラズ殊ニ公有林野ニ於テ其經營遲々トシテ進マザルモノアルヲ見ル而シテ之ガ將來ノ研究ト開發トハ一ニ懸リテ諸子ノ双肩ニアリ殊ニ諸子ハ斯業ニ關スル學理ノ大綱ヲ把握シ加フルニ實地演習ニツトメリ將來更ニ研鑽ヲ重ネ之ヲ實地ニ應用シ銳意斯業ノ開發ニ任セバ國富ノ増進ニ裨益スル所蓋シ鮮少ナラザルモノアラシ

諸子今日ノ榮譽ヲ空フスル所ナク更ニ一層ノ研究ト實地ノ經驗トヲ積ミ志ヲ人格ノ修養ニ潛メ國家有要ノ材ヲランコトヲ期スベシ
斯クノ如クンバ本校教養ノ精神ニ副ヒ諸子ノ前途ハ洋々トシテ春海ノ如キモノアラシ 諸子夫レ旃ヲ勉メヨ

大正十一年四月廿三日印刷
大正十一年四月廿五日發行

長野縣知事 岡田 忠彦
長野縣四筑摩郡福島町四番地
編輯兼發行人 安井正夫
長野縣松本市小柳町十五番地
印刷 川吉藏

送 辭

荒涼タル三冬既ニ盡キ春風春水將ニ一時ニ至ラントスルノ時茲ニ本校第十九回卒業證書授與ノ盛典ヲ舉行セラル兄等笈ヲ負ヒテ本校ニ學ブコト實ニ三星霜具サニ螢雪ノ勞ヲ積ミテ今ヤ本校ノ課程ヲ卒ヘ澄澗タル元氣ト祥々タル希望トヲ抱キテ我林業界ニ雄飛セラレントス兄等ノ光榮ト得意ト實ニ察スルニ余リアリ抑々我林業界ノ現狀ヲ顧ミルニ近年頗ル發展ノ氣運ニ向ヒ世人モ亦大聲疾呼シテ治水ノ急ヲ叫ビ砂防ノ要ヲ稱ヘツ、アリ即チ林業界ハ今ヤ漸ク多忙多事ヲ極メントシ開拓ニ整理ニ至ル處兄等ノ來ツテ新進ノ手腕ヲ試ミルヲ俟テルナリ諸兄ノ前途何ソ夫レ希望ニ充テルヤ何ソ夫責任ノ重大ナルヤ翻ツテ思フニ生等諸兄ト相共ニ提携スルコト茲ニ年アリ朝ニハ御嶽ノ雲ヲ仰ギ夕ニハ木曾川ノ流レニ俯シテ自然ノ美景ニ憧ガレ永久ノ神秘ニ我ヲ忘レテ語リシコトモソ幾度ゾ兄等ハ或時疑義ヲ解キ忠告ヲ與フル先輩クヲ鼓舞スルノ師友タリキ然ルニ今ヤ兄等ハ生等ヲ捨テ、四方ニ飛ビ去ラントスルナリ生等ノ悲痛如何ゾヤ然リト雖モ諸兄ハ平素練磨セル學術技能ヲ始メテ實地ニ活用シ彼ノ盤根錯節ニ向テ兄等ガ懷抱セル犀利ナル武器ヲ試ムベキ時ニ際會セリ生等ハ今日諸兄ガ本校ノ眞價ヲ發揮スベキ社會ノ戰鬪場裏ニ打ち出ズル門出ナルヲ思ヒテ肯テ兒女ノ態ヲ學ブノ愚ヲナサジ只希クハ諸兄ヨ假令山川万里ヲ隔ツト

答 辭

モ永ク今日ノ情誼ヲ忘ル、ナク時ニハ忠告ト訓戒トヲ寄セ生等後進ノ向フ所ヲ知ラシメヨ生等モ亦兄等ガ遺セル美風ヲ繼承シ兄等ガ箴言ニ則リ益々校風ノ發揚ニ力メントスサラバ行ケ諸兄親愛ナル諸兄ヨ永久ニ健在ナレ幸福ナレ聊カ無辭ヲ述ベテ送辭トス
大正十一年三月二十五日
長野縣木曾山林學校總代 小松雄二
凍雲既ニ晴レテ將ニ陽春ノ佳季ヲ迎ヘントスルニ際シ茲ニ本日ヲトシテ生等四十有四名ノ爲ニ卒業證書授與ノ盛典ヲ舉哉セラレ知事閣下ヲ始メ來賓各位ノ御臨場ヲ仰ギ剩サヘ知事閣下ノ告辭並ニ校長先生來賓諸賢ノ懇切ナル訓辭ヲ賜リ又在校生諸君ノ送辭ヲ辱シ生等ノ光榮何物カ之ニ如カンヤ顧ミレバ生等入學以來三歲ノ永キ星霜諸先生ニハ生等ノ指導誘掖ニ心勞セラレシ事幾許ゾ加之今又校長先生ヨリ生等ノ前途ニ對シ優渥ナル教誨ヲ賜ハリ生等何ノ辭ヲ以テカ之ニ答ヘン生等今ヤ纔ニ翼成リテ多端ナル社會ニ飛翔ヲ試ミニントスルニ當リ將來負荷ノ重且大ナルヲ想ヘバ生等ノ魯鈍能ク其ノ任ニ堪ヘ得ザラン事ヲ悞ル、ノミ生等淺識陋才ナリト雖モ至誠一貫勉勵鴻恩ノ万一二ニ報ユル所アラシト期ス謹ンデ一言蕪辭ヲ述テ答辭トス
大正十一年三月廿五日
長野縣木曾山林學校 片田敏郎
第十九回卒業生總代

長野縣松本市小柳町十五番地
印刷 所 淺川活版所
長野縣四筑摩郡福島町六番地
發行 所 瀧澤書店

【定價金參錢】